

(延載初)武三思率蕃夷酋長、請造天樞於端門外、刻字紀功、以頌周德、璿爲督作使』と見え新書紀本には其の翌天冊

萬歲元年(六九五)の條に、『四月戊寅建大周萬國頌德天樞』と記せり、則ち延載元年工を起して、翌年四月に成り

しものにして、通鑑によれば更に此の消息を悉すを得べし、其の延載元年八月戊寅の條下に『武三思帥四夷酋長、

請鑄銅鐵爲天樞、立於端門之外、

端門洛陽皇城正門南

銘記功德、黜唐頌周、以姚璿爲督作使、諸胡聚錢百萬億、以銅鐵不能

足、賦民間農器以足之』を曰ひ、之が竣成したる翌天冊萬歲元年の條には『夏四月天樞成、

天樞其制若柱高一百五尺、徑

十二尺、八面各徑五尺、下爲鐵山、周百七十尺、以銅爲蟠龍、麒麟縈繞之、上爲騰雲、承露盤、徑三丈、四龍人立

捧火珠、高一丈、工人毛婆羅造模、武三思爲文、刻百官及四夷酋長名、太后自書其榜、曰大周萬國頌復天樞』と見

ゆ。以上の記事によりて考がふれば、天樞は實に萬國頌德の紀念として、諸外人の資財を以て建設せんとしたるも

のにして、又たこれ武后及び其の臣下が周室の光を掲げて、其の根底を固めんとしたるに過ぎず、而して此の際阿

羅憾が此の事業の爲に力を盡し、諸蕃王の間に斡旋して遂に其の工を了りたるを考がふれば、彼が當時外臣及び朝

廷の間に重望を負ひし人なるを想見すべく、此の工獨り武三思、姚璿等の功のみを紀すべきに非るを知るべし。天

樞の模を作りし毛婆羅なる人も、其の名より考がふれば亦た遠く西域の人なりしなるべく、當時の文化に於て遠西

の色彩を加味せるもの多きの一端を伺ふに足るべし。此の石柱にして存すれば、上に刻せりと云はるゝ酋長の名の

中には、必ず阿羅憾の名もありしなるべければ、彼が世に伝へらるゝもの固とより當時を待たざる可きに、もそこ

れ周德頌揚の碑なれば、玄宗立ちて唐室を復興するや、『開元元年七月甲戌、令毀天樞、取其銅鐵、充軍國雜用』

(舊唐書 卷八)

翌年終に其の破壊に着手して(同上)、彼が焦心の紀念は其の名と共に永く世に亡ぶるに至れり。